
シスター・ドラゴン!!

サンソン 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シスター・ドラゴン！！

【Nコード】

N4780I

【作者名】

サンソン 琢磨

【あらすじ】

ヴァンヘルシング神父のもとで修行をしていた娘、シスター・ルナ。その敬愛していた神父が、憎きドラキュラ伯爵に殺害されてしまった！

そして、ルナは誓った。復讐してやると。

誕生！！（前書き）

さあ、頭のネジを緩めてお読みくださいまし。

誕生！！

時は十八世紀のイギリス。
首都、ロンドン。

工業発展を迎えて工場が建ち並び、都市開発や海外貿易で栄えていたその裏では、極端なまでの貧富の差、無宿の子供たち、そして、光化学スモッグの大量排出で霧の街ロンドンとも呼ばれた。

そして、この時期のロンドンでは歴史上未解決な猟奇的犯罪が数多く起こっていた時でもある。しかし、今から始まる物語は、どの書物にも記されていない歴史の闇で語られている出来事だった。

ヴァン＝ヘルシング神父。

殺害される！

この事件は、イギリス中を震撼させた。

霧の街ロンドンの闇を魔物達が跳梁して、街の住民たちを恐怖に陥れていたのだ。だが、その魔物達を退治する者が姿を現した。それが、ヘルシング神父だった。彼は、そのような力を持つ数ある神父たちの中でも特に秀でており、その力をもって次々と魔物達を消していったのだ。が、ある日それは突然と終わりを告げる。

ひとりのシスターの前で、ヘルシング神父は殺害されてしまう。父親同然の神父が殺されて、女の大きな碧い瞳からは次々に涙が流れ落ちていった。女は、無宿の子供たちの中から足を運び、自ら洗礼を受けてヘルシング神父の愛弟子となる。だが、もう、その神父もいない。

そして。

女は復讐に燃えた。

父親同然の神父の為に。
奴らの顔は焼き付けた。
必ず全滅させてやる。
信ずるは神父の教え。
信ずるは己の肉体。
己自身で道具を造り。
己自身が鍛える。
鋼のように。
そして、しなやかに。
イギリス式ボクシング？
そんなものは、知らん。
流派などは無い。
だが、敢えて云うなれば。
無手勝流。
完全なる復讐を誓い。
鍛錬に次ぐ鍛錬。
そして、十年の時が過ぎ。
女は完成した。

シスター・ルナ。二八歳、独身。
女は美しく成長していた。脅威的なまでの執念と復讐心。純粹な
信仰心と絶対的なまでに悪を赦さぬ心。自家製の武器を数々装備
したルナが、キリスト像の前に片膝を突いて祈りを捧げる。
祈りを終えて、教会の扉を勢いよく両手で跳ね開けると、勇まし
く歩み出た。朝日が眩しく輝き、小鳥たちの囀りが心地良い。絶好
の復讐日和ととらえたルナが、大地に足を踏ん張って、気合いを込
めた。

「いよつしゃあああつ！ 殴り込みじゃあああつ！！」

魔物城を訪ねて

「たのもーっ！」

シスター・ルナ、魔物城へとカチコミ！

生き成りな展開ではあるが、致し方ない。普通、目的を達成する間には、その行く先での町の人々との交流があり、道中を共にする仲間があり　　などがある筈だが。しかし、ルナにとってはそのような事は以ての外無駄！　黙々と聞き込んでゆき、真っ直ぐと辿り着いたのだ。

そして、城に居た魔物達はルナを見て驚く。

「な、なんやあつ！　鉄砲玉があつ！？」

「どこや、どこの教会のモンやコラ！」

三体のウェアウルフが、ルナに飛びかかって来る。その瞬間、ルナは背中に担いでいた巨大な十字架を素速く抜き取って、横一線に振り払った。それは、サーベル。その三体が灰となり、消失した。ロザリオサーベルを背中にしまい、ルナは目の前の魔物達を睨み付けた。

「僕は、ヴァン^{II}ヘルシング卿の愛弟子つ。シスター・ルナじゃあつ！　おどれらを皆殺しにすつ為に、僕はここまで来た！　おどれら、命なくす覚悟お決めいやあ！」

「人間のクセによか度胸じゃ！」

「失ねは、そつちやコラ！」

「血い見したるさかいな！」

魔物達がそれぞれ雄叫びをあげなが、ルナを狙って出撃していく。ルナに迫り来るゴブリン数体。腰に下げているショットガンを素速

く抜いて、ルナは聖水の弾効を撃ち出した。手早く充填を繰り返してゆきながら、聖水の弾効を連射してゆく。それぞれの弾効がゴブリン数体とウェアウルフ数体に命中して、次々と粉塵に変えていった。

翼を羽ばたかせて、グレムリン数体が、ルナを狙って弓矢を連射してゆく。聖水を染み込ませたマントで躰を庇いながら走り、大きな石柱に身を隠して様子をうかがうルナ。グレムリン達が矢の充填に入った隙を見たルナは、太股に装備していたハンドガン二丁を抜いて横に跳んで宙を舞った瞬間に、レーザーの如き聖水の射撃。それに躰を貫かれたグレムリン達が、次々と粉塵になって消えていった。受け身を取って転がり片膝を突いたと同時に、飛びかかって来たゴブリンにハンドガンに向けて射撃。立ち上がった流れで横からきたウェアウルフの腹に踵を突き刺した後に、身を翻して後方に居たゴブリンに銃口を向けて聖水を撃つ。そして、消失。

ルナの碧い瞳は、次の標的を見据えていた。

ガン＝カタもどき

両側から襲撃し迫るウェアウルフ二体に、ルナが両腕を広げて撃ち抜く。ゴブリンの振るう棍棒を跳び退けると着地して転がり、横たえたまま腕を伸ばして、襲撃してきたグレムリンをハンドガンで射抜いた。立ち上がりざまに躰を捻って脚を鞭のように振り上げて、ゴブリンの顎を蹴り飛ばす。そして、腕を交差させて両側のゴブリンを消し飛ばした。襲いかかる魔物達の爪を避けながら走り出して床を蹴り、跳躍して宙返り、着地。足を踏ん張って両腕を旋回させて同じ方向に銃口を二つ並ばせて、その狙う先は、跳躍して迫り来るウェアウルフ二体。聖水の射撃、そして、標的を粉碎。

階段を駆け上がってゆくルナに、次々と襲い迫る新手の魔物達。ルナがハンドガンを素速く持ち替えて、銃身を掴んで構える。魔物達はルナを取り囲むと、それぞれが爪を剥いて構えた。

数秒間の沈黙。

シュツと息を吐いて、ルナが力強く踏み出してハンドガンを振りかざした。銃の持ち手を前方のゴブリンの脳天に叩きつけた後に踵を返して銃を振り払い、横のウェアウルフの横っ面を砕いて別方向からきた爪を頭を下げてかわし、足を払う。足を掬われて床に背中を強打したゴブリンの視界には、ハンドガンの持ち手が映り込む。ルナは迷うこと無く銃を振り下ろして、ゴブリンの顔面を砕いた。踵を後ろに蹴りやって、背後のグレムリン数体を纏めて階段から転がし落とす。ウェアウルフの爪を転がってかわし、ゴブリンの斧を跳び退けて、着地をし受け身を取ったルナが空のカートリッジを壁に居るゴ布林達に二つ投げつけて、素速く聖水を装填。

再びハンドガンを持ち直して、ルナは聖水の射撃を始める。腕を

交差させて撃ち。攻撃からしゃがんで、両腕を広げて撃ち抜く。ウエアウルフの顎を蹴り上げて、射撃。そして、身を翻してゆきながら両腕を回したり交差させたり旋回させたりなどをして数々と迫り来る魔物達を撃ち抜いて、消し去っていったのだ。

それは、まるで、ルナの両腕が円または球の軌跡を描いていた。この女の名前の如く、撃ち出されてゆく聖水が魔物城の暗闇に光り輝いて、月を現していたようだ。

やがて、雑魚同然の魔物達を全滅させたルナが、次の階を目指して上っていった。

そこに居るのはヘルシング卿の仇である、ドラキュラ伯爵のみ。

対決！ドラキュラ伯爵！！

「来てやったぞ！コラあつ！」

ルナ、とある一室の扉を蹴破つて因縁のドラキュラ伯爵と御対面。
「ぶっ、たまげ！！！」

リーゼント頭のブロンドハンサムが、目を剥いて驚愕した。

「おおう！ぬしゃ、ひよっとしてヘルシング卿の弟子ならっ！？」

「おお、そうじゃ！」

儂やアンタに命殺とられたヘルシング神父の愛弟子っ！シスター・ルナいう者じゃ！ドラキュラ伯爵っ、今度はぬしが失いぬ番じゃけ、覚悟決めいやあ！」

そう云いきつて、ルナはドラキュラ伯爵へとハンドガン突きつけた。だが、伯爵が笑みを見せて

「神に仕える者達なんぼのもんじゃ。所詮は光は闇に呑み込まれてしまいじゃき、のお……」

「んふふ……」

「何じゃ？何が可笑しいんなら？」

笑い出したルナを見て、ドラキュラ伯爵が訊く。歯を剥きながらルナは語り出した。

「阿呆……っ。闇はなににも、おんしただけじゃないきに……」

「なをやとお……？」

「儂かて、闇に堕ちたんじゃー！」

そして、聖水を発射。

ドラキュラ伯爵はマントを翳して顔面を防御した。マントを下ろしたその時、銃口が目の前に。とっさに躰を仰け反らせて発射された聖水からかわすと、そのまま手を絨毯に突いて足を蹴り上げルナの手元からハンドガンを払いのける。着地したドラキュラ伯爵が片

膝を突いた後に立ち上がり、マントを翻して半身に構えた。その様子を見て、ルナは舌打ちをする。「ルナとやら、ぬしやなかなかのやり手やのお」

「ふんっ！ おどれら全滅さす為やったら、儂や汚くなっちゃるけ」ルナの言葉に、微笑したドラキュラ伯爵が滑るように間合いを詰めてきた。事実、絨毯からほんの僅かだけ爪先を浮かせていたのだが、ルナは逃げない。やがて、二人の間合いが僅か三〇センチと迫ったその瞬間、ルナがハンドガンを構えたと同時にドラキュラ伯爵の拳が二つ飛んできた。ひとつは手元からハンドガンを打ち払われて、もうひとつはルナの顔面を直撃する。自身の鼻柱の折れた音を聞いたルナ。パンチ力で躰が飛んだ。そして、天井を見上げる姿勢で躰を仰け反らせて浮き上がってゆき、絨毯に背中を打ちつける。ルナが長い両脚を交差させて、素速く跳ね起きた。再び、ドラキュラ伯爵に身構える。

(続)

花嫁を忘れるな

身構えるドラキュラ伯爵の影が三つに割けたかと思うと、そこから黒い盛り上がりが出ていき、やがてそれは、細くしなやかな形を成してドレス姿をした三人の女が現れた。皆それぞれ、髪型は縦ロールに整えており、三人の特徴は、蛇のような風貌の赤毛、猫みたいに愛嬌ある顔立ちの金髪、冷やかな眼差しを持つ黒髪。

ドラキュラ伯爵の花嫁である。

三人の女は、伯爵の前に並んで立つと、ルナに向けてお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。ワテはマゼンダどす、どうぞよろしゅうー」赤毛。

「遠い遠い所から遙々ご苦労さんでおしたなあ。私はマーガレットといます」金髪。

「女の子の独り旅、大変でしたやろなあ。ウチはリリーです、よろしゅうなあ」黒髪。

「そらどうも、随分とご丁寧に。僕はルナいますけ」と、シスター・ルナもお辞儀を返す。マーガレットが口元を指で隠して微笑んだ。

「ほほほ。礼儀正しいお嬢さんやわあー」

「そうですかいの？ そら、お返しをひとつさしてもらいますけ」

ルナは笑顔でそう云うと、銀製の杭を投げ上げた。

そして、踵で蹴飛ばす。

ザクツとマーガレットの左胸を貫いた。

「あわわわ…、なんやの…？ これ、なんやの…？ ねえ…？」

目に涙を溜めて、マーガレットは声を震わせながら己の左胸に刺さる杭を指差した。あつという間に粉塵と化して消失する。

中央に立っていたマーガレットが生き成り倒されたものだから、両側に立つ二人の花嫁は驚愕して叫ぶ。

「うわあーっ！ うわあーっ！ うわあーっ！ なしてや！ なしてや！ アンタそら不味いやる！」

「あかん！ あかん！ あかんよ！ これは、あかん！ ルール違反やわ！ ルナはん生き成りこれはないやる！」

その隙を狙ったルナが、残りの二人に向かって銀製の杭を投げ打った。一本は、マゼンダの眉間に。もう一本は、リリーの喉に。ルナの投げた杭は、気持ちの良いほど上手く命中してくれた。

そして、花嫁二人が消失する。

残るはドラキュラ伯爵、ただひとり。

「花嫁さん方、ご苦労さんじゃったのう」

ルナが歯を剥いて笑みを浮かべた。

(続)

決戦！ドラキュラ伯爵！！

「ぬしゃ、よーもやってくれたの！ 地方から選りすぐりの女たちを連れて来たんじゃないぞ！」

額に青筋浮かべたドラキュラ伯爵が、ルナに怒鳴りつける。予定していなかった展開に、驚いているようだった。

「じゃったら、儂を花嫁にしたらどないかの？」

「誰がおんしのごた女を花嫁に迎入れつか！」

ドラキュラ伯爵は、ルナのボケに犬歯を剥いて突っ込みを入れる。

「伯爵殿、とつとと終わらせましようかいの。夜明けも近いですけどぐぐぐ…っ。憎たらしい小娘じゃ…」

拳を力一杯握り締め歯軋りするドラキュラ伯爵。らしくない事に、伯爵は雄叫びをあげてマントを広げて突進してきた。ルナを目掛けて一直線に。猛スピードで迫り来るドラキュラ伯爵から逃げようとせず、シスター・ルナが腕を背に回して構える。伯爵は牙と爪を剥いて飛翔を加速した。目標は、ルナの肉を抉り首を跳ねる事。

そして、お互いの間隔が三〇センチと狭まった時。ルナは脚を縦に広げて身を落とし、背中から三日月の煌めきと共にサーベルを引き抜いた！ その瞬間、ドラキュラ伯爵の首から足先にかけて、赤い筋が斜めに走る。勢い余って、そのまま暖炉へと墜落した。黒ずんだ煉瓦は碎けて飛び散り、白い壁には太くて黒い亀裂が縦に走り、それは天井までも達した。

ルナは床に広げた長い両脚を折り畳んで立ち上がると、サーベルを鞘に収めて暖炉に振り返る。「お間抜けじゃのう」

実に冷たいひと言。

口を広げられた暖炉には、ドラキュラ伯爵の尻が顔を見せていたが、ここでようやくというか亀裂に引つかかっていたマントの端が

外れて、フワリと彼の尻を恥ずかしげに隠した。そんな光景を見ていたルナが、更に追い討ちをかける。

「ぷぷ…っ！ 頭隠して尻隠さず、じゃな…。伯爵殿…ぷぷっ」

ルナは、口元を指先で品良く隠したものの、目元は弓なりに歪んで露骨に侮蔑な笑顔を見せていた。窓に目をやり景色を見たら、暗闇にほんのりと色味と光りとが差し込んで、ダークグレーの雲の群れに白い稜線を描き出して始めていたのだ。

何やら感慨に浸り始めたルナ。

「ほんに《本当に》夜明けが近いのう…。このまま灰になるのも、悪くないかもしれんね。伯爵殿…。」

「こんまま灰になってたまるかいっ！」

ドラキキュラ伯爵、暖炉の瓦礫を押し退けて復活！

「おおっ、立ちおった！ まだまだ元気やのっ、伯爵殿！」

「小娘にケツ晒したまんま灰になってたまるかいっ！ 阿呆っ！」

ドラキキュラ伯爵が青筋浮かべて、驚くルナに怒鳴りつける。肩を大きく動かして息を切らしている伯爵。

「な…なんなら、この屈辱感は…？ ぬしゃ、ほんにヘルシング卿の弟子かいの…？」

「おお。間違いなく僕はヘルシング卿の愛弟子じゃけえ」

ルナが自信たっぷりに胸を張って断言した。ドラキキュラ伯爵は、無言でマントの埃を叩き落として構え直した。微笑を見せたルナは絨毯床を力一杯蹴飛ばして、ドラキキュラ伯爵へと真っ直ぐ突っ込んでゆく。懐に入った直後に、サーベルを引き抜いて袈裟を狙って振り下ろす。瞬間、ルナの目の前で無数の蝙蝠が飛び散って背後に集まっていった。それはもう、蜘蛛の子を散らす勢いだったらしく、直視していたルナの体中にゾワゾワと鳥肌が立ち駆け巡る。生理的な嫌悪感も同時に覚えて、何だか躰が痒い。

無数の蝙蝠が集まってゆき、やがて黒い影は人型を形成してブロードのドラキキュラ伯爵を再生させたのだ。黒いベルベットのマント

を翻して、ルナを目掛けて襲いかかってゆく。

「ふはは！ 隙ありじゃな、小娘っ！」

迫り来る背後の殺気に感じいて、ルナが踵を返す。

ドラキュラ伯爵の爪が走る。

ルナ、脚を絡ませて転けた。

そして、伯爵の爪は虚しく空気を抉り取った。着地して振り返り、ルナの頭を狙って爪を振り上げたその時だった。

「いつ…痛あゝゝい…」

スカートを太股まで露わになるほど捲り上げて、横座りのルナが色っぽく声を出したのだ。よく見ると、白い膝小僧からは鮮やかな鮮血を流していた。血の香りが、ドラキュラ伯爵の高い鼻を刺激して通過する。

伯爵は誘惑と葛藤し始めた。

同時に、動きが止まる。

これは、不味い事態。

「隙ありじゃ、伯爵殿っ」

ルナが語尾にハートを付けて、オマケに可愛い笑顔でドラキュラ伯爵の心臓に杭を打ち込んだ。伯爵の躰は忽ち大理石の色へと変わってゆき、そして、呆気なく灰となって崩れ落ちた。

やがて、窓の隙間からキラキラと朝陽が差し込んでくる。そして、ルナは腕を組んで窓を見詰めながら、復讐を終えた味を噛み締めたのだ。

『シスター・ドラゴン！』 完結

決戦！ドラキュラ伯爵！！（後書き）

このような拙作を読んでいただきまして、ありがとうございます。やりたい放題もいいところです。でも、お姉さんキャラは好きなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780i/>

シスター・ドラゴン!!

2011年8月7日03時26分発行